

# 川端康成「伊豆の踊子」における省略された主体の解釈をめぐって

—文学語用論からのアプローチ—

澤田 淳

## 1. はじめに

本稿では、川端康成の「伊豆の踊子」における省略された主体の解釈について、文学と語用論を架橋する「文学語用論」(literary pragmatics)の観点から考察を試みる。

語用論は、ことばの背後に存在するコンテキスト(文脈)を手がかりに、話し手・書き手が聞き手・読み手に対して用いたことばの意味や働きを考察する言語学の一分野である。文学語用論は、その中でも、語用論の観点から文学を研究する分野である。ここでは、Huang (2012)の文学語用論の定義を挙げておく。

- (1)文学語用論は、明確に定義された統一的理論というより、ある研究領域をカバーする用語とみなすのが最も実情に即している。文学語用論は、語用論、文学理論、文学哲学が交わる領域である。文学語用論は、語用論的な観点から、文学テキストにおける言語形式の使用と、社会・文化的コンテキストにおかれた作者、テキスト、読者の関係を研究する分野であり、とりわけ、文学テキストが何をどのように伝達しているのかという問題に焦点を当てる。文学語用論には相補的な2つの側面が認められる。1つは、語用論における諸理論の洞察が、どのようにして文学研究に生かされ得るのかという点であり、もう1つは、文学語用論の洞察が、どのように一般的な語用論の諸理論に貢献できるかという点である。

(Huang 2012: 175)

また、Chapman (2011: 142)は、「意味がどのように伝達され、作中人物同士がどのように関わり合い、また、テキストの作者や語り手と読者とがどのように関わり合うのか」といった諸相を説明するために、語用論の理論を個々の文学テクス

トの言語の分析に適用する」と述べ、語用論の文学への応用可能性を論じている<sup>1</sup>。

文学語用論が語用論の一分野として明確に認識されるようになったのは、おそらくMey (2001)あたりからであると考えられる(Mey (2001)は、領域横断的・学際的なテーマを扱う語用論を「マクロ語用論」と称しているが、その中に文学語用論を含めている)。文学語用論は「若い」分野と言えるのである。これは、分析哲学の一派である日常言語学派の研究を取り入れることによって語用論が言語学の中において地歩を固め始めたのが1970年代頃と遅く、また、語用論がまず研究対象としたのが、「日常言語」であり、「文学言語」(ないしは、「フィクションの言語」)ではなかったといった点が背景にあると言える(この点については、Jucker (2015: 63-64)の議論も参照されたい)。

文学語用論は、文学テキストを対象とする点で、物語論(ナラトロジー)や文体論とテーマや関心が重なる部分が多い。特に、「視点」は、物語論、文体論、文学語用論のいずれにおいても重要なテーマの1つとなっている。物語論や文体論では、通例、文学言語に即した概念や道具立てが用いられる。一方、文学語用論では、日常言語の考察に対して用いる概念や道具立て(推意、言語行為、前提、指示、ダイクシス、(イン)ポライトネス、等)も幅広く援用した分析がなされている。概念や道具立ての多様さは文学語用論の特徴である<sup>2</sup>。

国語学においては、つとに、時枝(1955: 103-104)が「文學は、本質的に言語そのもの」であり、「言語と文學とは、それが表現であることにおいて、これを連続的なものと見なければならぬ」と述べている。すなわち、「文學の世界を、より廣大な言語の世界との関連において眺める」(時枝1955: 106)ということであるが、このような視点・発想は、語用論においても認められる。語用論が文学

---

<sup>1</sup> 文学語用論、ないしは、文学と語用論との関係については、さらに、Van Dijk (ed.) (1976)、Fillmore (1981)、Leech and Short (1981)、Sell (1998, 2019)、Mey (1999, 2001)、MacMahon (2006)、Leech (2008)、Pilkington (2010)、Stein (ed.) (1992)、Jucker (2015)、Chapman and Clark (eds.) (2014, 2019)、Rocher and Jucker (eds.) (2017)等を参照されたい。

<sup>2</sup> ただし、文体論の中には、語用論の概念や道具立てを積極的に採り入れるものもある(たとえば、Jeffries and McIntyre (2010)参照)。そこでは、特に、戯曲のテキストに現れる相互行為的な会話(対話)を分析する際に、語用論や会話分析の手法が採り入れられている。また、語用論と(文学)文体論とを融合させた「語用論的文体論」(pragmatic stylistics) (Black 2006)や「語用論的文学文体論」(pragmatic literary stylistics) (Chapman and Clark (eds.) 2014)といった分野を立てる研究もあるが、具体的な研究事例を見る限り、「文学語用論」と「語用論的(文学)文体論」との間に径庭はほとんどないと言える。

の領域へと考察を広げていったのは自然な流れであったと言える。

文学語用論では、「語用論における諸理論の洞察が、どのようにして文学研究に生かされ得るのか」という問題意識の方向性と、「文学語用論の洞察が、どのように一般的な語用論の諸理論に貢献できるか」という問題意識の方向性の2つがある (Huang 2012: 175)。本稿では、主に前者の問題意識のもと、「伊豆の踊子」のテキストに見られる省略現象について考察を行う。

## 2. 「伊豆の踊子」における省略された主体は誰か

### 2. 1. 読者による解釈の揺れ

次の文章は「伊豆の踊子」(1926年(大正15年)発表)における一節である。「孤児根性」に悩む一高生(旧制高校生)の「私」が伊豆での一人旅で出会った旅芸人一座の幼い「踊子」との別れを、情景豊かに描いている場面である(使用テキストは『川端康成全集 第二巻』(新潮社、1980年)。以下同様)。

- (2) 乗船場に近づくと、海際にうづくまつてゐる踊子の姿が私の胸に飛び込んだ。傍に行くまで彼女はじつとしてゐた。黙つて頭を下げた。昨夜のままの化粧が私を一層感情的にした。眦の紅が怒つてゐるかのやうな顔に幼い凛々しさを興へてゐた。榮吉が言つた。

「外の者も来るのか。」

踊子は頭を振つた。

「皆まだ寝てゐるのか。」

踊子はうなづいた。

榮吉が船の切符とはしけ券とを買ひに行つた間に、私はいろいろ話しかけて見たが、踊子は掘割が海に入るところをじつと見下したまま一言も言はなかつた。私の言葉が終らない先き終わらない先きに、何度となくこくりこくりうなづいて見せるだけだつた。

(中略)

はしけはひどく揺れた。踊子はやはり臂をきつと閉ぢたま一方を見つめてゐた。私が繩梯子に捉まらうとして振り返つた時、さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた。はしけが歸つて行つた。榮吉はさつき私がやつたばかりの鳥打帽をしきりに振つてゐた。ずつと遠ざかつてから踊子が白いものを振り始めた。

(川端康成「伊豆の踊子」321-323頁)(下線筆者)

ここでの下線部箇所「さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた」に関しては、その省略された主体の解釈をめぐり、これ

まで文学、言語学の双方から議論がなされてきた(村松1968、サイデンステッカー・安西1983、細川1987、1990、高本1997、三川1998、澤田2013、2019、中村2016、2018、滝浦2017、平野2019等)。問題の箇所については、川端自身がその省略された主体の解釈に関して解説・批評を行っている点でも特別である(川端康成「一草一花「伊豆の踊子」の作者」(『風景』8巻10号(10月号)～8巻12号(12月号)、1967年)。

細川(1990)は、1987年に、金沢大学の教養部の1・2年生622人を対象に、下記の(3)の箇所を読ませ(使用テキストは岩波文庫版)、「この文のなかで、「さよならを言おうとした」のは誰か」に関して、(a)「私」、(b)「踊り子」、(c)「栄吉」、(d)「どれかわからない」の4つの選択肢の中から適当なものを1つ選ばせるという調査を行い、表1の調査結果を示している(細川1990: 20)。

- (3) はしけはひどく揺れた。踊り子はやはり唇をきっと閉じたまま一方を見つめていた。私が縄梯子につかまろうとして振り返った時、さよならを言おうとしたが、それもよして、もう一ぺんただうなずいて見せた。はしけが帰って行った。栄吉はさっき私がやったばかりの鳥打ち帽をしきりに振っていた。ずっと遠ざかってから踊り子が白いものを振り始めた。

a 私	b 踊り子	c 栄吉	d 不明	合計
272人 (43.7%)	312人 (50.2%)	5人 (0.8%)	33人 (5.3%)	622人 (100%)

表1 「さよならを言おうとした」のは誰か(細川1990: 20)

表1では、「踊り子」と回答した割合が最も高いが、興味深いことに、「私」と回答した割合もそれに拮抗する高さとなっている。

また、『文芸まんがシリーズ 新装版 伊豆の踊り子』(川端康成(原作)・小田切進(監修)・望月あきら(作画)、ぎょうせい、2010年、115頁)では、「さよならを言おうとした」主体が「私」として描かれている<sup>3</sup>。

<sup>3</sup> また、『コミック版 伊豆の踊子』(川端康成(原作)・井出智香恵(漫画)、ホーム社、2010年、161頁)では、「私」の心内発話として「さようならも言えなかった……」というセリフが書かれている。

<sup>4</sup> 図1に関しては、株式会社ぎょうせいより、転載・引用の許可を頂いた(2020年10月12日)。



図1 「さよならを言おうとした」主体（『文芸まんがシリーズ 新装版 伊豆の踊り子』（川端康成（原作）・小田切進（監修）・望月あきら（作画）、ぎょうせい、2010年、115頁）<sup>4</sup>

作者の川端自身が「一草一花『伊豆の踊子』の作者（六）」（『風景』8巻10号（10月号）、1967年）において、問題の箇所省略された主体は「踊子」として明言しており、本稿の筆者もそのように解釈して特に注意を払うことなく読んでき

<sup>5</sup> 筆者も、(2)の「榮吉が船の切符と～」からはじまるテキストをもとに、青山学院大学の学部学生71名（71名は日本人。実際のアンケート調査では、外国人留学生7名を含む78名）を対象に、アンケート調査を行った（2019年5月7日実施）。回答者には、「さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた」における省略された主体が誰であるかを、「私」、「踊子」、「榮吉」、「わからない」の選択肢の中から1つ選択するよう求めた（なお、「はしけ」、「はしけ券」、「掘割」、「繩梯子」、「鳥打帽」については、注によって語義の説明を付した）。結果は次の通りであった。

a 私	b 踊子	c 榮吉	d わからない	合計
7人 (9.9%)	62人 (87.3%)	1人 (1.4%)	1人 (1.4%)	71人 (100%)

表 i

細川（1990）の調査に比べ、「私」よりも「踊子」と回答した割合が高いという結果となった。細川（1990）の調査に比べアンケートの規模が小さいため、ここでの調査結果を細川（1990）の調査結果と単純に比較することはできないが、ここでの調査において、「踊子」の割合が高い理由の1つとして、細川（1990）がアンケート調査で提示したパッセージよりも長いパッセージを提示したことが影響していると考えられる。このことは、「踊子」を選択した回答者の多く（62人中52人）が、「踊子」を選択した理由（の1つ）として、「もう一ぺんただうなづいて見せた」の箇所と、その前に出ている踊子がうなづいている描写との対応関係を挙げていた点からもうかがえる。

たが、細川（1990）の調査結果、さらには、次節で見るサイデンステッカーによる翻訳、及びその解説（サイデンステッカー・安西1983）などに触れる中で、「伊豆の踊子」の問題のテキストにおける省略現象が語用論的に見て奥深い問題を含むものであることを認識するに至った<sup>5</sup>。

次節では、英語、中国語、韓国語の翻訳テキストにおいて、「伊豆の踊子」の問題のテキストにおける省略された主体がどのように解釈されているのかを見る。

## 2. 2. 翻訳における解釈

エドワード・ジョージ・サイデンステッカー(Edward George Seidensticker)<sup>6</sup>による翻訳‘The Izu Dancer’（1954年版）では、次のように、原文の問題の省略された主体がI（私）で訳されている（この点については、サイデンステッカー・安西（1983: 133）、さらに、川端康成「一草一花「伊豆の踊子」の作者（六）」（『風景』8巻10号（10月号）、1967年、17頁）参照）。

- (4) The lighter pitched violently. The dancer stared fixedly ahead, her lips pressed tight together. As I started up the rope ladder to the ship I looked back. I wanted to say good-by, but I only nodded again. The lighter pulled off. Eikichi waved the hunting cap, and as the town retreated into the distance the girl began to wave something white.  
(Yasunari Kawabata, translated by Edward Seidensticker. ‘The Izu Dancer’, *Perspective of Japan, An Atlantic Monthly Supplement*. New York: Intercultural Publications, 1954年, 18頁)（下線筆者）

この英訳に関して、サイデンステッカーは、サイデンステッカー・安西（1983: 131-133）において次のように詳細な解説を施し、問題の箇所が誤訳であったと述べている。

- (5) この引用の中には、少なくとも一個所、かなり重要な間違いがある。特に恥かしいとは思わない。ある程度長い翻訳なら、大なり小なり、いくつかが間違いが出てくることはまず避けられないことだ。少なくとも私の場合、ごく短いものならともかく、多少とも長い翻訳となると、後で

---

<sup>6</sup> サイデンステッカー（1921-2007）は、アメリカの日本文学研究者。昭和22年アメリカ国務省職員として来日、25年退職して東大大学院で平安朝文学を研究。上智大、スタンフォード大、ミシガン大、コロンビア大などでおしえた。谷崎潤一郎、川端康成らの作品や「源氏物語」などを翻訳して海外に紹介した（以上、『日本人名大辞典』による）。

かならず間違いに気がつく。ただ、この引用に現われている例は、中でも特に興味のある誤解の例で、というのもこれは、私の記憶する限り、川端さんが自分でわざわざ私の注意をうながした唯一の例だったからである。川端さんは、自作について語ることも、その翻訳について云々することも好まなかったようで、私の英訳について私と話したこともほとんどなかった。多少とも批評めいたことを口にしたのは、今思い出して見るのに、この一個所だけだったように思う。

この間違いが興味深いというのは、もう一つ理由がある。紫式部の場合と同様、川端を読む時にも、よほど細心の注意をはらっていないと、つい主語を見失ってしまうという事実を、まことに雄弁、端的に示してくれる例だからである。片時も注意をゆるめてはならない。この個所では、私はつい注意がゆるんでしまっていたようだ。もっと気をつけているべきだった。

引用のほぼ真中あたり、「はしけはひどく揺れた」で始まる段落の3番目の文章である。

私が繩梯子に捉まろうとして振り返った時、さよならを言おうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなずいて見せた。

御覧のように、原文はまず「私」という、一人称の代名詞で始まっている。この文章の中には、ほかには代名詞は一つも現われてこない。いかにも川端らしい書き方だが、同じような書き方が紫式部に出てきても、少しもおかしくないだろうと思う。読者は、十分に注意して読んでゆかなくてはならない。というのも、どこにも表に出して説明はしてないけれども、文の途中で主語が変化しているのだ。私はこの変化をうっかり見逃し、最初の「私」がそのまま文全体の主語であると思って、“I wanted to say good-by, but I only nodded again.”と訳してしまった。けれども実は、「さよならを言おうとした」のも、「もう一ぺんうなずいて見せた」のも、どちらも踊子のほうなのである。「もう一ぺん」というのが鍵で、これは実は、その前のパラグラフの、「こくりこくりとうなずいて見せるだけだった」を受けているのであって、これが主語が変わったということの合図だったのである。しかし形の上では、主語の移動は明示されてはいない。川端の文体の典型的な例として、非常に興味のある例だと思ふし、同時にまた、こうした文体を訳するのがいかに難しいか端的に示す例でもあると思う。

(サイデンステッカー・安西1983: 132-133)

ここで、サイデンステッカーは、「もう一ぺんただうなずいて見せた」が、前文脈に現われている「こくりこくりとうなずいて見せるだけだった」と対応関係をなしており、「もう一ぺん」が問題の省略された主体を踊子と解すべき「鍵」であったと述べている。語用論の観点からは、「もう一ぺん」のような「反復表現」(iteratives) は、「前提」(presupposition) を導出する表現（「前提トリガー」(presupposition triggers)）とみなされる（Huang 2014: 87）。一般に、前提とは、「話し手（及び聞き手）が発話に先んじて事実だと想定している事柄」を指す。たとえば、「太郎がたばこを吸うのをやめた」という文は「太郎が以前たばこを吸っていた」という前提を含む。同様に、「もう一ぺんただうなずいて見せた」という文は「前にうなづいた」という前提を含む。

その後の1997年出版の再訳（サイデンステッカー訳）では、問題の箇所主体がsheに修正されている<sup>7</sup>。

---

<sup>7</sup> サイデンステッカーの1954年版の翻訳では、主に掲載雑誌の紙幅の制限から「全体を乗せることができず」、原文箇所の幾つかの部分がカットされている（サイデンステッカー・安西1983: 130）。サイデンステッカーの次の述懐部分は興味深い。

(i) もう一つ、この翻訳に関しては、ここに引用された部分のことではないけれども、今は多少残念に思っている点がある。カットした部分の中には、この小説の冒頭近く、天城峠の茶屋で主人公が兩宿りし、踊子の一行に追いつく場面で、永年中風をわずらっている茶店の老人に会うところがある。「水死人のように全身蒼ぶくれ」の醜怪な老人だが、この老人の話を私はカットしてしまったのである。どういう理由だったか、今はよく憶えてない。多分、あまり深く考えてもみなかったのだろう。ともかく、ページ数の関係で、どこかはカットしなければならない。それなら、ここを切ってもいいのではないか—そんなことを考えたのだらうと思う。

しかし今になってみると、同じカットするにしても、この部分を切ったのは殊のほか思慮の足りないことだったと思う。今訳すとしたら、こんなことは絶対にやらないだろう。というのも美しいものと醜悪なもの、みずみずしいものと腐敗したものが結合している点こそ、実は川端の作品にとって核心的な意味をもっているからである。川端がノーベル賞を受けた時にも、この点はほとんど見過ごされていたのではないかという気がする。川端の世界の可憐なもの、エキゾチックな面だけに注目する傾向が目についた。しかしこれは、いわば観光客の目で見えた川端でしかない。（サイデンステッカー・安西1983: 130-131）

1997年版の再訳では、この老人の描写箇所を含め、全面的な加筆がなされている。サイデンステッカーの1954年版と1997年版の翻訳テキストの比較分析については、Kataoka (2016) を参照されたい。



(6) The lighter pitched violently. The dancer stared fixedly ahead, her lips pressed tight together. As I started up the rope ladder to the ship I looked back. I could see that she wanted to say goodbye, but she only nodded again. The lighter started back. Eikichi waved the hunting cap, and as the lighter retreated into the distance she began to wave something white.

(Yasunari Kawabata, translated by Edward Seidensticker. 'The Izu Dancer', In: Theodore W. Goossen (ed.) (1997) *The Oxford Book of Japanese Short Stories*. Oxford: Oxford University Press. 147頁) (下線筆者)

次に、中国語による翻訳を見てみよう。叶渭渠・唐月梅（訳）『伊豆の舞女』（南海出版公司、2014年）では、次のように訳されている。

(7) 舞女依然紧闭双唇，凝视着一个方向。我抓住绳梯，回过头去，舞女想说声再见，可话到嘴边又咽了回去，然后再次深深地点了点头。

（「踊子はやはり唇をきつと閉ぢたまゝ一方を見つめてゐた。私が繩梯子に捉まらうとして振り返つた時、さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた」の箇所に対応訳）

（叶渭渠・唐月梅（訳）『伊豆の舞女』南海出版公司、2014年、104頁）（下線筆者）

ここでの訳では、原文における問題の省略箇所が「舞女」（踊子）という形で言語的に明示化されることにより、問題の主体が踊子であることが理解できるようになっている。

中国語では、「舞女」（踊子）を明示化しない次の（8）では、後続文における問題の主体（＝「さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた」主体）が「我」（私）と解釈されてしまい、「舞女」（踊子）とは解釈できなくなる。つまり、「舞女」（踊子）は、日本語の原文のように省略できないのである<sup>8</sup>。

(8) 舞女依然紧闭双唇，凝视着一个方向。我抓住绳梯，回过头去，想说声再见，可话到嘴边又咽了回去，然后再次深深地点了点头。 (cf. (7))

---

<sup>8</sup> 朱楽寧氏、唐銘遠氏、姚凱氏との個人談話に負う。

次に、韓国語による翻訳を見てみよう。신인섭 (訳) 『이즈의무희·천마리학·호수 (伊豆の踊子・千羽鶴・みづうみ)』 (을유문화사, 2010年) では、次のように訳されている。

(9) 무희는 역시 입을 꾹 다문 채 한쪽만을 응시하고 있었다. 나는 줄사다리를 붙잡으려고 돌아보았을 때 잘 있으라고 말하려 하다가 그것도 그만 두고 다시 한 번 그저 고개를 끄덕여 보였다.

(「踊子はやはり脣をきつと閉ぢたまゝ一方を見つめてゐた。私が繩梯子に捉まらうとして振り返つた時、さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた」の箇所に対応訳)

(신인섭 (訳) 『이즈의무희·천마리학·호수』 을유문화사, 2010年, 44頁) (下線筆者)

ここでは、「내가 (nayka)」「(私が)」ではなく、「나는 (nanun)」「(私は)」で始まる文で訳されていることから、「さよならを言おうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた」主体が「踊子」ではなく「私」と解釈されて、訳されていることがわかる<sup>9</sup>。

このことは、さらに、「さよならを」の箇所が「잘 있으라고 (cal issulako)」で訳されているという点からもわかる。韓国語では、別れの挨拶の言葉(日本語の「さようなら」に相当する表現)は、次のように、(i) その場から立ち去る相手に向かって言う場合と (ii) その場に留まる(残る)相手に向かって言う場合とで、異なる表現が使われることが知られている。

(10) 韓国語の別れの挨拶言葉(日本語の「さようなら」に相当する表現)<sup>10</sup>

a. その場から立ち去る相手に向かって言う場合:

잘 가라 (cal kala) / 안녕히 가세요 (annyenghi kaseyyo)、等

b. その場に留まる(残る)相手に向かって言う場合:

<sup>9</sup> 韓国語のローマ字表記はイェール式に拠る。イェール式のローマ字表記に関しては、浅尾仁彦氏(国立研究開発法人情報通信研究機構)が開発された「ハングル→イェール式ローマ字変換」ツール(<http://asaokitan.net/tools/hangul2yale/>)を利用して頂いた。

<sup>10</sup> 「잘 가라 (cal kala)」、「잘 있어라 (cal issela)」では「라 (la)」を省略して使うこともできるが(例: 「잘 가 (cal ka)」、「잘 있어 (cal isse)」)、「잘 있으라 (cal issula)」では「라 (la)」を省略して使うことはできない。また、現代韓国語においては、「잘 있어라 (cal issela)」の方が「잘 있으라 (cal issula)」よりも、より一般的な(よく使われる)表現であるようである。

잘 있어라 (cal issela) / 잘 있으라 (cal issula) / 안녕히 계세요  
(annyenghi kyeysesyo)、等

基本的に、aタイプの表現は、(留まる者[見送る者]の視点から)その場から立ち去る相手に言う別れの挨拶、bタイプの表現は(立ち去る者の視点から)その場に留まる相手に言う別れの挨拶である。この点で、韓国語の別れの挨拶言葉には、別れの挨拶を言う話者の「視点」の違いが反映されていると見ることもできる(aタイプの表現では、「行く」系の移動動詞(「가다(kata)」(行く)、「가시다(kasita)」(行かれる)が、bタイプの表現では、「いる」系の存在動詞(「있다(isssta)」(いる)、「계시다(kyeysita)」(おられる)が含まれている点も興味深い点である)<sup>11</sup>。

このように、(9)の韓国語訳では、原文の「さよならを」が「잘 있으라고(cal issulako)」で翻訳されていることから、「留まる相手=踊子」に向かって「私」が「さよなら」を言ったと解釈されていることがわかるのである。

日本語の原文に即した訳にするためには、少なくとも、次のように、「나는(nanun)」(私は)を「내가(nayka)」(私が)に変えたと共に、「잘 있으라고(cal issulako)」を「잘 가라고(cal kalako)」に変える必要がある<sup>12</sup>。

(11) 무회는 역시 입을을 꼭 다문 채 한쪽만을 응시하고 있었다. 내가 줄사다리를 붙잡으려고 돌아보았을 때 잘 가라고 말하려 하다가 그것도 그만두고 다시 한 번 그저 고개를 끄덕여 보았다. (cf. (9))

以上、英語、中国語、韓国語の代表的な翻訳書を例に、問題のテキストの翻訳を見てきた<sup>13</sup>。「伊豆の踊子」の問題のテキストが、他の言語に翻訳する際において「難所」となり得ることがわかる<sup>14</sup>。

### 2. 3. 川端自身による批評・解釈

川端は、「一草一花『伊豆の踊子』の作者」(『風景』8巻10号(10月号)～8巻12号(12月号)、1967年)の中で、問題の一文の主体の解釈について詳細な解説を行っている(高本(1997)、三川(1998)等も参照)。やや長いが以下に引用する。

<sup>11</sup> なお、現象は異なるが、日本語の挨拶言葉の中にも、「ただいま」(帰宅した者の視点)と「お帰り(なさい)」(帰りを待つ者の視点)、「行ってきます」(出かける者の視点)と「行ってらっしゃい」(送り出す者の視点)のように、視点の違いを反映した表現の対がある。

<sup>12</sup> 韓京子氏、朴賢率氏、黄智彦氏、張洪準氏、辛周洪氏との個人談話に負う。

(12) 発表年月についての質問のほかに、もう一つ、幾度も質問の手紙を受けるのは、「伊豆の踊子」の次のくだりである。

「はしけはひどく搖れた。踊子はやはり唇をきつと閉ぢたま一方を見つめてゐた。私が繩梯子に捉まらうとして振り返つた時、さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた。」

ここで、「うなづいた」のは、「私」か踊子かといふ問ひである。また、「さよならを言はうとした」のは、「私」か踊子かといふ問ひである。教科書によつて「伊豆の踊子」を學習の時に、教室で疑問が出て、議論となつて、中學生が、あるひは中學の國語教師が、作者の私に問ひただして來るわけだ。はじめ、私はこの質問が思ひがけなかつた。踊子にきまつてゐるではないか。この港の別れの情感からも、踊子がうなづくのでなければならぬ。この場の「私」と踊子との様子からしても、踊子であるのは明らかではないか。「私」か踊子かと疑つたり迷つたりするのは、讀みが足りないのではなからうか。

「もう一ぺんただうなづいた。」で、「もう一ぺん」とわざわざ書いたのは、その前に、踊子がうなづいたことを書いてゐるからである。「私」と踊子の兄とが、

「乗船場に近づくと、海際にうづくまつてゐる踊子の姿が私の胸に飛び込んだ。傍に行くまで彼女はじつとしてゐた。黙つて頭を下げた。昨夜のままの化粧が私を一層感情的にした。眦まなじりの紅が怒つてゐるかのやうな顔に幼い凛々しさを興へてゐた。榮吉が言つた。

『外の者も來るのか。』

踊子は頭を振つた。

『皆まだ寝てゐるのか。』

踊子はうなづいた。

---

<sup>13</sup> 「伊豆の踊子」の中国語訳、韓国語訳は他にも出版されているようである。他の中国語、韓国語の翻訳テキストの調査、及び、英語、中国語、韓国語以外の言語における翻訳テキストの調査は今後の課題としたい。

なお、穆 (2013) は、「伊豆の踊子」の原文テキストと中国語、韓国語の翻訳テキストに見られる主題の省略に関する比較調査を行っている。合わせて参照されたい。

<sup>14</sup> なお、日本語非母語話者にとって、省略の多い日本語テキストの正確な解釈が必ずしも容易ではないという点については、ラガナ (1975: 46-50) に幸田文『流れる』の冒頭の一文（「このうちに相違ないが、どこからはいつていいか、勝手がなかった。」）の解釈をめぐる興味深いエピソードがある（この興味深いエピソードは、「ラガナ氏の戸惑い」として、池上 (2000: 239-241) にも詳しい議論がある。合わせて参照されたい）。

栄吉が船の切符とはしけ券とを買ひに行つた間に、私はいろいろ話しかけて見たが、踊子は掘割が海に入るところをじつと見下したまま一言も言はなかつた。私の言葉が終らない先き終わらない先きに、何度となくこくりこくりとうなづいて見せるだけだつた。」

踊子がうなづいたと、こんな風に二度書いてある。それを受けて、「もういっぺんただうなづいた。」と書いたのである。乗船場の踊子は一言も言はないで、ただうなづくだけなのである。はしけから汽船に乗り移らうとする「私」が振り返つて、うなづいたのでは、「うなづき」の効果は失はれてしまふ。

ところがしかし、読者の質問の手紙にうながされて、疑問の個所を讀んでみると、そこの文章だけをよく讀んでみると、「私」か踊子かと迷へば迷ふのももつともだと、私ははじめて気がついた。「私が繩梯子に捉まらうとして振り返つた時、さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた。」では、「さよならを言はうとした」のも、「うなづいた」のも、「私」と取られるのが、むしろ自然かもしれない。しかしそれなら、「私が」ではなくて「私は」としさうである。「私が」の「が」は、「さよならを言はうとした」のが、私とは別人の踊子であること、踊子といふ主格が省略されてゐることを暗に感じさせないだらうか。それにしても、「(踊子は) さよならを言はうとした」の踊子といふ主格を省略したために、読者をまどはせるあいまいな文章となつた。英譯者のサイデンステッカー氏も「私」としてゐる。

“As I started up the rope ladder to the ship I looked back. I wanted to say good-by, but I only nodded again.”

(川端康成「一草一花「伊豆の踊子」の作者(六)』『風景』8巻10号(10月号)、1967年、16-17頁)

ここでは、「うなづいた」のは、「私」か踊子かといふ問いに対して、当初は「踊子にきまつてゐるではないか」と感じていた川端が、「読者の質問の手紙にうながされて、疑問の個所を讀むうちに、「(踊子は) さよならを言はうとした」の踊子といふ主格を省略したために、読者をまどはせるあいまいな文章となつた」という認識を持つに至る心境の変化の過程や心境のゆらぎが読み取れる。

一方で、川端は、問題の省略された主体が「踊子」と解せる論拠として、大きく、2点の論拠を挙げている。1点目は、先のサイデンステッカー同様、「もう一ぺんただうなづいて見せた」との対応箇所が前文脈で認められる点、2点目は、「私は」ではなく「私が」となっている点である。とりわけ、2点目の「は」と「が」の点は、これまでの研究においても、問題の省略された主体が「踊子」であると

解釈されるべき重要な根拠として示されてきた点である（細川1987、1990、澤田2013、2019、中村2016、2018、滝浦2017等）。たとえば、細川（1990: 16）は、「この文の場合は、（中略）「私が縄梯子につかまろうとして振り返った時」の「が」が重要ではないか」とし、「文構造の上からみれば、（中略）「は」と「が」によって、この「さよならを言おうとした」人物がわかるようになっている」と述べている。

次節では、「指示追跡」(reference tracking) の観点から、「は」と「が」の問題を含め、問題の文の省略された主体についての語用論的分析を行う。

### 3. 語用論からの分析

#### 3. 1. 指示追跡

指示対象の追跡・同定は、談話・テキストを正確に理解・解釈する上で重要となる。このような指示対象の追跡・同定を可能とする語彙・文法装置が自然言語には用意されている。談話・テキストの中で聞き手・読み手が指示対象を追跡・同定するための手掛かりとなる言語的装置のことを「指示追跡システム」(reference-tracking system) という (Foley and Van Valin 1984, Van Valin 1987, Comrie 1989a, 1998, 澤田2020等)。

指示追跡は文法と語用論の境界領域の現象である (Van Valin 1987: 513, 澤田2020: 152)。指示追跡を可能とする言語的手段として、(i) ジェンダー、(ii) (再帰) 代名詞、(iii) 交替指示 (switch reference)、(iv) 交替機能 (switch function)、(v) 疎化 (obviation)、(vi) 敬語、(vii) 話題継続性 (topic continuity) などの現象が知られている (Haiman and Munro (eds.) 1983, Foley and Van Valin 1984, Van Valin 1987, Comrie 1989a, 1999, Nariyama 2003, 山田2004, 澤田2020等)。ここでは、交替指示の現象を取り上げてみよう。

交替指示とは、複数の節からなる文において、先行する節と後続する節の主語 (の指示対象) が同一 (SS) なのか、異なる (DS) のかを、動詞接辞によって区別する現象を指す (古賀2015a: 87)。大堀 (2002: 297) によれば、交替指示はアメリカ先住民の言語において観察されて以降、類型論研究の広がりと共に、パプア諸語をはじめ、節連鎖 (clause chain) を多用する多くの言語で見られることが明らかになってきた現象とされる。次はパプアニューギニア島北岸の都市マダンで話されているハーウェイ語 (Harway) (パプア諸語に属する言語) の交替指示の例である (SS: 同一主語、DS: 非同一直語、Pres: 現在形、3sg: 三人称単数、Dec: 叙述) (Comrie 1989a)。

- (13) a. Ha döyw nwg<sup>w</sup>-ön, bör dw-a.  
child rat see-SS run go:Pres:3sg-Dec

'The child saw the rat and he ran away.'

- b. Ha döyw nwg<sup>w</sup>-mön, bör dw-a.  
child rat see-DS run go:Pres:3sg-Dec

'The child saw the rat and it ran away.' (Comrie 1989a: 41)

この例では、動詞接辞önとmönの形態的区別が、後続節の主語（の指示対象）を特定する（追跡する）唯一の手掛かりとなっている。

日本語では、接続助詞の種類の違い、及び、「は」と「が」の係り方の違いにより、交替指示に近い現象が生じる（三上1970、野田1986、Nariyama 2003、山田2004、澤田2020等）。三上（1970）が挙げる次の例を見てみよう。

- (14) a. 太郎が上着を脱いで、ハンガーにかけた。  
b. 太郎は上着を脱いで、ハンガーにかけた。  
(15) a. 太郎が上着を脱ぐと、ハンガーにかけた。  
b. 太郎は上着を脱ぐと、ハンガーにかけた。 (三上1970: 11)

(14) の接続助詞「て」の場合、節の結合度が強いいため、「が」と「は」の違いに関わらず、後続節の主体は先行節の主体と同一と解釈される。一方、(15) の接続助詞「と」の場合、接続助詞「て」に比べ節の結合度が弱いいため、後続節の主体は先行節の主体と異なるという解釈も生じる余地が出てくる。特に、(15a) のように、先行節の主体が「が」で標示された場合、「が」は「と」節に収まる傾向が強いため（野田1986）、後続節の主体は太郎以外の誰かと解釈されやすくなる。一方、「は」は従属節を飛び越え、主節まで係っていく特性を有するため、(15b) の従属節の主体は「太郎」であると解釈される（三上（1970）参照）。

同様に、次の例を比較してみよう（澤田（2007、2020）も参照）。

- (16) a. 太郎は一着でゴールインした時、皆が拍手をしてきていることに気づいた。  
b. 太郎が一着でゴールインした時、皆が拍手をしてきていることに気づいた。

ここでは、主節の「皆が拍手をしてきていることに気づいた」主体が現われていないが、その主体は、a 文では太郎と解釈され、b 文では太郎以外の誰か（ここでは話者）と解釈されやすい。「は」は「時」節（南（1974）のいう「B類従属句」）を飛び越え、主節まで係っていくが、「が」は「時」節内に収まる傾向が強いためである<sup>15</sup>。

「伊豆の踊子」からも幾つか例を挙げておこう。以下の例では、「私が」は「と」節（B類従属句）に収まるため、主節の主体は「私」とは解釈されない<sup>16</sup>。

(17) 私が振り返ると笑ひながら言つた。

（川端康成「伊豆の踊子」300頁）（下線筆者）

(18) 私が振り返つて話しかけると、驚いたやうに微笑みながら立ち止つて返事をする。

（川端康成「伊豆の踊子」314頁）（下線筆者）

このような従属節（B類従属句）における「は」と「が」の係り方の違いを踏まえるならば、問題の一文において「が」でマークされた「私」は「時」節内に収まると解釈されるのが普通である。したがって、「さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた」主体は私以外、すなわち、ここでは、踊子と解するのが最も自然な解釈となる（この点については、先に見た細川（1990: 16）の解釈も参照されたい）。

(19) 踊子はやはり脣をきつと閉ぢたまま一方を見つめてゐた。私が繩梯子に捉まらうとして振り返つた時、さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた。

---

<sup>15</sup> 次の実例は、三上（1969: 137）が「文法違反」として挙げている例である。

(i) ところがソ連の発表はまるで違う。その米飛行機はウラル山中の上空まで侵入し、そこでロケットの一撃で撃ち落としたのだという。しかも操縦士は生きており、モスクワに連れてこられたと、その名前まで発表している。

（「天声人語」）（三上1969: 137-138）

この文は、「米飛行機」が「は」で標示されており、文末まで係ろうとしているにも関わらず、文末が「（ソ連が）ロケットの一撃で（米飛行機を）打ち落とした」となっており、動作の主体が「米飛行機」で貫徹していない（途中で動作の主体が「ソ連」に切り替わってしまっている）。

<sup>16</sup> 野田（1986: 35）によれば、次の例のように、「が」がB類従属句（この例では「と」節）の中だけに収まらずに主文にもかかかっていくように見える実例も見られることがあるとされる。

(i) でもそんな彼がある夜、私の家の門のところまで送ってくると、急に私を抱きしめていました。（長峰ヤス子『炎のように火のように』24頁）（野田1986: 35）

ただし、野田（1986: 35）によれば、一般に、「～が」がB類の従属句を通り越して文末まで係っていくのは難しく、不安定な感じがするため、このような例は多くないとされる。



以上の分析は、「私が」の「が」は、「さよならを言はうとした」のが、私とは別人の踊子であること、踊子といふ主格が省略されてゐることを暗に感じさせないだらうか(12)参照)という川端の直観を裏づけるものとなる。

さらに、本稿では、三上(1969)の「ピリオド越え」の観点から、問題の省略された主体が「踊子」であると解釈されるべき点を補強しておきたい。

三上(1969: 117)の言う「ピリオド越え」とは、「[Xハ]がピリオド(マル、句点)を越えて、次々の文まで及んで行く」現象をいう(さらに、久野(1978: 103)も参照)。ピリオドを越えた二文目以降の文では、「Xハ」で明示化されず、「略題」<sup>17</sup>ないしは「ゼロ照応」(zero anaphora)となつて、話題(主題)が継続される。この意味で、ピリオド越えは、「話題継続性」(topic continuity)(Givón(ed.) 1983)を保証する現象であると同時に、「指示追跡」の機能を有する現象とみなすことができる。たとえば、以下の例では、ピリオド越えが認められる(iは同一指示の標識、[φ]は略題ないしはゼロ照応(ゼロ代名詞)を示す。以下、同様)。

- (20) 踊子<sub>i</sub>は階下で宿の子供と遊んでゐた。[φ<sub>i</sub>は]私を見るとおふくろに縄について活動に行かせてくれとせがんでゐたが、顔を失つたやうにぼんやり私のところに戻つて下駄を直してくれた。

(川端康成「伊豆の踊子」320頁、一部改変)(下線筆者)

- (21) 踊子<sub>i</sub>は竹束のところまで引き返すと、また走つて來た。[φ<sub>i</sub>は]今度はず指くらゐの太さの竹を私にくれた。そして、[φ<sub>i</sub>は]田の畦に背中を打ちつけるやうに倒れかかつて、苦しげな息をしながら女達を待つてゐた。(川端康成「伊豆の踊子」317頁、一部改変)(下線筆者)

「伊豆の踊子」の問題の文の一つ前の文は「踊子は」で始まっており、この「踊子は」は、次のように、ピリオド越えをして、問題の文の「略題」となつてゐる<sup>18</sup>。

- (22) 踊子<sub>i</sub>はやはり唇をきつと閉ぢたまま一方を見つめてゐた。私が縄梯子に捉まらうとして振り返つた時、[φ<sub>i</sub>は]さよならを言はうとしたが、

<sup>17</sup> 「略題」とは「前文の題目におんぶして、その一文としては題目の言表を欠くこと」を指す(三上1969: 119)。

<sup>18</sup> [φ<sub>i</sub>は]は、「私が縄梯子に捉まらうとして振り返つた時」の直前にあるとみることもできる。

それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた。

(川端康成「伊豆の踊子」322-323頁、一部改変)(下線筆者)

このように、「Xハ」のピリオド越えにより、問題の文が「踊子は」を「略題」として有する文となっている点も、問題の文の省略された主体が「踊子」であることを補強する重要な論拠となるのである。

ここで、「Xハ」のピリオド越えに関して、もう少し議論をしておきたい。三上(1969)は、「Xハ」のピリオド越えに関して次のような示唆に富む指摘をしている。

(23)「Xハ」は、ピリオドのところでいちおうの役目は果たしていても、なお余力を保持しているものと認めておかねばなりません。だから、「Xハ」を次文へ続かせないためには、余力を遮断する手を打つ必要も起こります。(三上1969: 123-124)

次の例は、「遮断の不じゅうぶんな例」の1つとして、三上(1969: 126)があげている実例(今日出海<sup>19</sup>「官僚」の冒頭部分の例)である(使用テキストは、今日出海「官僚」『現代紳士録』(創元社、1953年))。

(24) 本多誠吾は役所の出迎への自動車を待たせて、父の位牌の前に坐つて暫らく瞑目した。昭和三年に大學を出て内務省に入り、埼玉縣の保安課長を振り出しに警察畑に育つて行くつもりだつたのに、役所同士の話し合ひであらうか、文部省の事務官に引きとられて行つた。それから今日まで教育行政官として働いてゐるうちに遂に官房の課長となった。

父が廣島の地方裁判所に勤めてゐる時、脳貧血の發作で倒れた拍子に頭を打ち、それから時々激しい頭痛に襲はれ、役所を退官してしまつた。それから隠居仕事のやうな土耳其大使官に翻譯官として雇はれてゐたが、家はその安い月給で暮らさねばならぬので、誠吾の兄は月謝の要らぬ陸軍士官學校へ入り、太平洋戦争の頃は華やかな參謀大佐として昭南の軍司令部に勤め、ガダルカナルの作戦指導へ赴任の途中飛行機が撃墜されて、遺骸も判らぬ戦死の公報に接した。

(今日出海「官僚」91頁)(下線筆者)

<sup>19</sup> 今日出海(1903—1984)は小説家、評論家。フランス文学を専攻し、昭和8年明大教授。24年フィリピン戦線の従軍記録「山中放浪」を発表。25年「天皇の帽子」で直木賞。43年文化庁初代長官。53年文化功労者(以上、『日本人人名大辞典』による)。

三上 (1969: 126) は、この例について、次のように述べている。

- (25) むろん誠吾の父が退官したのですが、「父ガ」は「勤メテイル時」までで解消しやすいですから、以後の「役所ヲ退官シタ」までに、前の「本多誠吾ハ」に係る可能性が残っていて、やや不安定です。

前文との関係を別にしても、この第二パラグラフのように長い文全体を微力な「父ガ」で貫かせることに無理があるようです。

(三上1969: 126)

すなわち、(24) のテキストは、(i) 「Xハ」(「本多誠吾は」) のピリオド越えの特性に反している点、(ii) 第二パラグラフの第一文目の「Yガ...時」(「父が...時」) における「Yガ」(「父が」) が「時」節を通り越して主文まで係っているために、「不安定」な文章となっているというわけである。

興味深いことに、問題の「伊豆の踊子」の例 (=26) と「官僚」の例 (=27) は、(28) のパターンをなす点では類似している。

- (26) 踊子はやはり臂をきつと閉ぢたまま一方を見つめてみた。私が繩梯子に捉まらうとして振り返つた時、さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた。

(川端康成「伊豆の踊子」322-323頁) (下線筆者)

- (27) 本多誠吾は役所の出迎への自動車を持たせて、父の位牌の前に坐つて暫らく瞑目した。(中略) 父が廣島の地方裁判所に勤めてゐる時、脳貧血の發作で倒れた拍子に頭を打ち、それから時々激しい頭痛に襲はれ、役所を退官してしまつた。(今日出海「官僚」91頁) (下線筆者)

- (28) Xハ..... Yガ... 時、φ...

しかし、「伊豆の踊子」の例は、「官僚」の例と表面上の構造的類似性を有するものの、(i) 「Xハ」のピリオド越えの特性に合致している点、(ii) 「Yガ...時、」における「Yガ」が「時」節に収まっている点で、文法上(文章上)の「不安定さ」はない。

ただし、「官僚」のような実例が見られるという事実は、一方で、「伊豆の踊子」の問題の一文の省略された主体が、「私」と解釈(誤読)されることがあるという事実(細川(1990)の大学生を対象としたアンケート調査の結果などを参照)を考える上で示唆的である。「伊豆の踊子」の誤読的な解釈は、「官僚」の解釈と類似した解釈となるからである。

問題の一文が誤読を引き起こし得る箇所であると判断されたためであろうか、

角川文庫『伊豆の踊子』（平成25年5月10日 改版61版発行）では、次のように、問題のテキストに対して「踊子は」を補うという変更が施されている。

- (29) 踊子はやはり唇をきっと閉じたまま一方を見つめていた。私が縄梯子につかまろうとして振り返った時、踊子はさようならを言おうとしたが、それもよして、もう一ぺんただうなずいて見せた。  
(角川文庫『伊豆の踊子』改版61版発行（2013年）、角川書店、37頁）（下線筆者）

川端が、問題の一文について、「踊子という主格を省略したために、読者をまどはせるあいまいな文章となつた」（(12) 参照）と述べているのも故無きことではない。

しかしながら、一方で、「指示追跡」の観点から解析した場合、「伊豆の踊子」の問題のテキストには、省略された主体が「踊子」であると唯一的に特定可能な複数の言語的手がかり（「時」節（B類従属句）における「が」の勢力範囲、及び、ピリオド越え）が用意されているのであり、テキストの解釈においてこれらの言語的手がかりに意識的である限りにおいては、問題のテキストを「あいまいな文章」とみなす必要はないと思われるのである<sup>20</sup>。

このように、日本語では、接続助詞の種類の違い、「は」と「が」の係り方の違い、「は」のピリオド越えによって、指示追跡が可能となっているが、日本語では他にも、敬語、授受表現、方向表現などの「ダイクシス表現」も指示追跡の機能を（副次的に）有している（菊地1994、Nariyama 2003、野田2004、山田2004、成山2009、澤田2020等）。以下、この点について見ておきたい（(31)の「てくる」は（省略された）主語による空間移動を伴わない「行為の方向づけ」用法の「てくる」（澤田2009、2016）であると想定する）<sup>21</sup>。

- (30) (ホテルのフロントで。フロント係の者から客への発話)  
a. お客様、おかばん、お持ちになりますか。

<sup>20</sup> 久野（1978: 8）は、「省略の根本原則」として、「省略されるべき要素は、言語的、或いは非言語的文脈から、復元可能（recoverable）でなければならない」と述べている。これによれば、問題の「伊豆の踊子」のテキストにおいて省略されている「踊子」は、「言語的、或いは非言語的文脈」（具体的には、「時」節における「が」の勢力範囲、ピリオド越え、等）から復元可能であるとみなすことができる。

<sup>21</sup> 久保田（2017）は、(31b)のような方向性制約を有する「ある」を「逆行類」の「ある」と称している。

b. お客様、おかばん、お持ちしますか。 (澤田2020: 155)

(31) a. 夜中に電話をした。

b. 夜中に電話をしてきた／夜中に電話があった。

(30) においては、かばんを持つ主体は、a 文では尊敬語が使われているため聞き手(客)、b 文では謙譲語(謙譲語 I)が使われているため話し手(フロント係の者)であると理解される。また、(31)においては、電話をした主体は、動詞の普通形が用いられた a 文では通例、話し手であると解釈され、「てくる」形や「ある」形が用いられた b 文では話し手以外であると解釈される(例:「!\*私／君／太郎」が夜中に電話をしてきた」、「!\*私／君／太郎」から夜中に電話があった)。

次は、駅の構内に掲示されていた「やめましょう、歩きスマホ。」キャンペーンのポスターに書かれていたメッセージである。

(32) ぶつかった、とあなたは思う。ぶつかってきた、と周りは思う。

(「やめましょう、歩きスマホ。」キャンペーンのポスター) (下線筆者)

この例では、動詞の普通形と「てくる」形とを使い分けることで、「(私が) ぶつかった」、「(見知らぬ他人が) ぶつかってきた」という形で省略された主体が誰かが理解可能となっている。

近藤(2005a, b)は、中古語における副詞節の節連鎖(副詞節が次々と連続してゆくタイプの複文現象)を扱う中で、中古語の副詞節において、交代指示に似た現象が観察されることを指摘している。近藤(2005a: 155)によれば、時間的な継起的事象を示す場合、「ば」を用いる場合と「に」を用いる場合があるが、「ば」は「基本的には、主語が交替する場合を中心に使用され」、逆に、「に」は「主語が交替しない例はいくらでも見ることができる」とされる。

この近藤(2005a)の指摘を参考に、次の例を解釈してみよう(使用テキストは、『新編日本古典文学全集12 竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』(小学館))。

(33) (大江の玉淵がむすめ(遊女)がすばらしい歌を詠んだことに帝は深く感心して)

帝、御桂ひとかさね、はかまたまふ。「ありとある上達部、みこたち、四位五位、これに物ぬぎてとらせざらむ者は、座より立ちね」とのたまひければ、かたはしより、上下みなかづけたれば、かづきあまりて、ふた間ばかり積みてぞ置きたりける。

(大和物語・一四六 鳥飼院・367頁) (下線筆者)

ここでは、「ば」が交代指示的な役割を果たしており、「ば」の前後で主語が交替している。すなわち、「のたまひければ」の主語は「帝」、「かづけたれば」の主語は「上下みな」、「かづきあまりて、ふた間ばかり積みてぞ置きたりける」の主語は「大江の玉淵がむすめ」と解釈される。ここでは、動詞「かづく」も、主語の交替を理解する（すなわち、指示追跡を行う）上での手掛かりを与えている。すなわち、「かづけたれば」の「かづく」は下二段活用動詞であり、「(ほうびとして) 与える」の意を表すことから、与え手の「上下みな」が主語であり、「かづきあまりて」の「かづく」は四段活用動詞であり、「(ほうびとして) いただく」の意を表すことから、受け手の「大江の玉淵がむすめ」が主語であることが理解される。

主語の交替（ないしは、省略された主語の追跡）は、敬語によっても理解可能であることはよく知られている。たとえば、次の例では、述語が尊敬語、謙譲語・無敬語のどちらで標示されているかにより、省略されている動作の主体が「帝」か「橘の良利」のどちらであるかが明確に判別できる（小田2018: 221-222）（ここでは、「御ぐしおろしたまひければ」の「ば」の交代指示的な機能も、主語の判別（追跡）に一役買っている）（使用テキストは、『新編日本古典文学全集12 竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』（小学館））。

- (34) 帝、おりゐたまひて、またの年の秋、御ぐしおろしたまひて、ところどころ山ぶみしたまひて行ひたまひけり。備前の掾にて、橘の良利といひける人、内におはしましける時、殿上にさぶらひける、御ぐしおろしたまひければ、やがて御ともに、かしらおろしてけり。人にも知られたまはで歩きたまうける御ともに、これなむおくれたてまつらでさぶらひける。  
(大和物語・二 旅寝の夢・253-254頁)

言語類型論的に、日本語は「代名詞脱落言語（プロ・ドロップ言語）」(pro-drop languages) (Fillmore 1986: 95) に部類され、省略の多い言語として知られているが、日本語の中には、歴史を通じて指示追跡機能を果たす様々な言語装置が組み込まれており、テキスト・談話において参与者（とりわけ省略された主語）の追跡・同定が可能となっているのである（澤田2020: 155）。

指示追跡にどのような言語装置が利用されるかは言語によって異なる。たとえば、北米先住民言語の一大語族であるアルゴンキン語族 (Algonquian) に属する諸言語では、「疎化」(obviation) と呼ばれる現象が指示追跡の役割を担っている。疎化とは、「三人称を話題性の度合いに応じて区別する現象」(古賀2015b: 81) のことである。この現象を持つ言語では、談話上、話題性の高い三人称は「近接形」(proximate) で、それ以外の（すなわち、相対的に話題性の低い）三人

称は「疎遠形」(obviative)で標示される(Wolfart and Carroll 1981: 25、Dahlstrom 1986: 108、Comrie 1989a: 43-44等)。また、近接形／疎遠形の区別は、名詞から動詞まで幅広く適用されるとされる(Comrie (1989a: 43) 参照)。次の例は、平原クリー語(Plains Cree)のテキストの一部である(Cnj: 接続、Prox: 近接形、Obv: 疎遠形、Dir: 順行形、3: 3人称)(Comrie 1989a)。

- (35) Mēkw ē-pimohtē-t ispatināw wāparht-am, ē-āmaciwē-yit  
 while Cnj-walk-3Prox hill see-3Prox Cnj-climb-3Obv  
 ayīsiyiniw-a, nāpēw-a. Ēkwa kitāpam-ē-w kitāpākan  
 person-Obv man-Obv and:then observe-Dir-3Prox spy glass  
 ē-kanawāpākanēhikē-yit ayīsiyiniw-a ē-nanātawāpam-ā-yit.  
 Cnj-look:through:spy:glass-3Obv person-Obv Cnj-look:for-Dir-3Obv  
 Kiskēyim-ē-w ayahciyiniw-a. Ēkwa o-paskisikan pihtāsō-w;  
 know-Dir-3Prox Blackfoot-Obv and:then 3Prox-gun load-3Prox  
 mōstkištaw-ē-w ē-pimisini-yit.  
 attack-Dir-3Prox Cnj-lie-3Obv

‘While he (the Cree) was walking he saw a hill on which someone (the Blackfoot), a man, was climbing. And then he (the Cree) observed him (the Blackfoot), as he (the Blackfoot) was looking through a spy glass, as he (the Blackfoot) was looking for people. He (the Cree) knew him (the Blackfoot) for a Blackfoot. And then he (the Cree) loaded his gun and he (the Cree) attacked him (the Blackfoot) as he (the Blackfoot) lay down.’ (Comrie 1989a: 43-44)

このテキストには、主に、クリー族の男と(敵対する)ブラックフット族の男の2人の三人称の参加者が登場している。このテキストはクリー族(平原クリー語)によるテキストであるため、同じ三人称の参加者であっても、クリー族の男のほうがブラックフット族の男よりも話題性の高い三人称(すなわち、クリー族の男は三人称・近接、ブラックフット族の男は三人称・疎遠)とみなされている。このテキストにおいて、クリー族の男の行為を表す動詞が近接形で標示され、一方、ブラックフット族の男(及びブラックフット族)を表す名詞や、ブラックフット族の男の行為を表す動詞が疎遠形で標示されているのはこのためである<sup>22</sup>。

このように、平原クリー語に代表されるアルゴンキン語族に属する諸言語では、近接形と疎遠形の標示システムによって、参加者(上のテキストでは、クリー族の男とブラックフット族の男)の指示追跡(同定)が可能となっているのである。

先に、日本の古典文学テキストに現れる副詞節の節連鎖と敬語に着目して、古

典日本語における指示追跡機能の一端を見た（例（33）、（34））。省略された参与者（とりわけ主語）の追跡（判別）は古典文学のテキスト解釈において古くから実践されてきたことではあるが、「節連鎖」、「指示追跡」、「交替指示」といった概念を与えることで、古典文学のテキストを、より普遍性の高い概念によって説明することが可能になる（この点については、近藤（2001）の提言<sup>22</sup>も参照されたい）。日本の文学研究の中で積み重ねられてきた豊かなテキスト解釈の知見が言語学にとってアクセスしやすい形に一般化されることによって、日本の文学研究から世界の言語研究（一般言語学）への貢献という可能性も拓かれるであろう。

### 3. 2. 視点

「伊豆の踊子」は、語り手であり、かつ、物語の主人公でもある「私」の視点から描かれている一人称の物語（first-person narrative）である。小林（2016: 136）は、「伊豆の踊子」が「私」の視点から語られている物語であることを、次のテキスト部分に着目して示している。

- (36)「學生さんが澤山泳ぎに来るね。」と、踊子が連れの女に言つた。  
「夏でせう。」と、私が振り向くと、踊子はどぎまぎして、  
「冬でも……。」と、小聲で答へたやうに思はれた。  
「冬でも？」  
踊子はやはり連れの女を見て笑つた。  
「冬でも泳げるんですか。」と、私がもう一度言ふと、踊子は赤くなつて、  
非常に真面目な顔をしながら軽くうなづいた。  
（川端康成「伊豆の踊子」300頁）（下線筆者）

小林（2016: 136）は、この箇所について、「語り手「私」は、踊子が本当に「冬

---

<sup>22</sup> なお、(35) のテキストでは、クリー族の男からブラックフット族の男に対する他動的行為を表す他動詞（「観察する」「攻撃する」等）には、「順行形」（direct: Dir）も付加されている。この現象は、「順行／逆行」（direct/inverse）という行為の方向性に関わる文法現象である。平原クリー語に代表されるアルゴンキン語族の諸言語では、「二人称＞一人称＞三人称・近接＞三人称・疎遠」という人称階層（上位＞下位）に基づき、上位から下位の参与者に対する他動的行為に対しては順行形が、逆に、下位から上位の参与者に対する他動的行為に対しては逆行形が動詞に付加される（Wolfart and Carroll 1981, Dahlstrom 1986, Comrie 1989b等）。(35) のテキストにおいて、クリー族の男（三人称・近接）からブラックフット族の男（三人称・疎遠）に対する他動的行為を表す他動詞に順行形が付加されているのはこのためである。



でも……」と答えたのかどうかを語らない。「小声」であったゆえに作中人物「私」が聞き取れなかった踊子の発話内容を語り手が断定することはない。踊子の発話内容はあくまで、作中人物「私」がそう聞き取った（「ように思われた」）という形で表れる。語り手「私」は、踊子の内面（心）の動きを直接に物語ることもしない」と述べている<sup>24</sup>。

ところが、川端は、次のように、「一草一花 「伊豆の踊子」の作者（六）」において、「〔（踊子は）さよならを言はうとしたが、それも止して〕と、ここだけ踊子側から書いてあるのは、全体をやぶる表現」であり、「〔私〕が見た書き方」になっていないと述べている。

<sup>23</sup> 近藤（2001）は、古典文法研究に関して、次の示唆に富む提言を行っている。

- (i) 近年の古典語文法、特に平安時代語の文法研究の状況は、それ以前とはかなり違った様相を見せている。従来型の、いわゆる解釈文法を中心として歩んできたいわゆる「国文法」研究からすこし離れて、現代の言語学的理論をそのまま援用する形で、文学研究から自立して単独に存在できる記述文法としての古典文法研究が徐々に増加してきている。十五年ほど前までは、古典語研究には、テンスとかアスペクトなどの用語を用いることさえできなかったことからすれば隔世の感がある。（中略）

しかし、その半面、古典語を文学研究から切り離して研究することにより、古典文法研究と文学研究とが乖離する傾向が著しくなるといふデメリットが生じていることも否めない。これはどちらの学問にとっても不幸なことである。このようなわけで、今後の研究としては、理論的な手法を導入することのよさは生かしつつ、日本語の古典文学を普遍的な概念で説明できるような文法研究という目標も視点に入れることが必要になってくると考えられる。それによって、言語理論もより高度な段階に到達でき、諸言語の研究に有益な貢献をなすことも考えられるし、一方、文学研究にも有用な情報をもたらすことができるであろう。

そのような研究を進めるためには、現在、文学研究者がどのような情報を必要としているのかということを確認することが重要である。（近藤2001: 96-97）

中古語における副詞節の節連鎖の現象を交代指示の概念を援用して捉える近藤（2005a）の研究は、「日本語の古典文学を普遍的な概念で説明できるような文法研究」の1つの実践例とみることができる。

<sup>24</sup> 類例として、次の例が挙げられよう。

- (i) 玄關を出ようとすると踊子は犬の頭を撫でてゐた。私が言葉を掛けかねた程によそよそしい風だつた。顔を上げて私を見る氣力もなささうだつた。

（川端康成「伊豆の踊子」320頁）（下線筆者）

(37) 翻譯の場合とか學習の場合とかは、一語一語をゆるがせにしないで確かめてゆき、もちろん、主格のあやふやなどはゆるがせにしない。作者としては、たとへばこの「私」か踊子かの質問のやうなのは、ていねいな讀者の警告あるひは叱正を得たとして、感謝しなければならぬだらう。踊子といふ主格を補つて、讀者の疑惑をふせいでおいていいだらう。主格の一語を入れたところで、その文章をそこねるやうでもない。しかし、私はそれを怠つてゐる。「伊豆の踊子」は近年もいろいろの形で新版が出たが、私はその主格を省略したままで通した。主格を入れる入れないの部分が、氣をつけて讀むと、不用意な粗悪な文章だからである。主格を補ふだけではすまなくて、そこを書き直さねばならぬやうに思へるからである。

「私が繩梯子に捉まらうとして振り返つた時、さよならを言はうとした」の「振り返つた時」を「振り返ると」に改めると、「振り返つた時」とあるよりも、その下の主格の省略がやや分りいいかもしれないが、まあ似たもので、やはり「踊子は」と主格を入れた方がはつきりする。どちらにしても、この改筆は簡單である。ところが、それにつづく、「さよならを言はうとしたが、それも止して」がいけない。「伊豆の踊子」はすべて「私」が見た風を書いてあつて、踊子の心理や感情も、私が見聞きした踊子のしぐさや表情や會話だけで書いてあつて、踊子の側からはなになに一つ書いてない。したがつて、「(踊子は) さよならを言はうとしたが、それも止して」と、ここだけ踊子側から書いてあるのは、全体をやぶる表現である。

踊子がなにか言ひさうにしたらしいが、それが「さよなら」といふ言葉であつたかどうかは、「私」にはわからない。あるひは、ここの「さよなら」はただなにか別れのあいさつの言葉といふ意味であつたにしても、「言はうとしたが」は、「私」が見た書き方ではない。「それも止してもよくない。英譯は踊子ではなく「私」になつてゐるが、「それも止して」は省かれてゐる。また、「踊子はやはり唇をきつと閉ぢたま一方を見つめてゐた。」の「一方」も、一方とはどちらなのか。ここではあいまいな「一方」であるはずがない。こんな風だから、主格の一語を補ふだけですまなくて、舊作の三四行を書き直さねばならないとなると、私は重苦しい嫌惡にとらへられてしまふ。もし仔細にみれば、全編ががたがたして來さうである。

(川端康成「一草一花 「伊豆の踊子」の作者(六)」『風景』8卷10号(10月号)、1967年、17-18頁)

安藤 (2014: 159) は、「近代小説においては、視点の合理的一貫性、という観点から、誰が、どのような「資格」で語るのか、が常に問題にされなければならない」とする。すなわち、近代小説では、「あるひとりの人物が語り始めた以上、それは最後まで一貫したものでなければならず、その人物に見えないはずの世界が描かれることがあってはならない」(安藤2014: 159) ことを基本とする。(37)における、「伊豆の踊子」はすべて「私」が見た風を書いてあつて、踊子の心理や感情も、私が見聞きした踊子のしぐさや表情や会話だけで書いてあつて、踊子の側からはなになに一つ書いてない。したがつて、「(踊子は) さよならを言はうとしたが、それも止して」と、ここだけ踊子側から書いてあるのは、全体をやぶる表現である」という箇所からは、「視点の一貫性」を重視する川端の姿勢が読み取れる。

川端の自己批評に呼応する形で、言語学の立場から高本 (1997) が、文学の立場から三川 (1998) が、それぞれ、問題の一文が「不用意な視点転換」を含む文 (高本1997: 478)、「語り手」が「私」にとって完全な〈他者〉である踊子の〈視点〉に同化してしまっている」文 (三川1998: 233) と批評している。

しかし、問題の一文は、本当に、視点の一貫性を欠いた「全体をやぶる表現」なのであろうか。結論を先取りするならば、問題の一文は、一貫して「私」の視点から描かれている文であるともみることが可能であると考ええる。このような立場に立ったとき、大きく2つの反論が想定される。

想定される反論の1つ目として、この一文が一貫して「私」の視点を反映した文であるならば、なぜ、踊子が発しようとして発さなかった言葉を「私」が「さよなら」であると認識できたのかという点が挙げられる。たとえば、三川 (1998) は、次のように論じている。

(38)「私」から見て明らかに〈他者〉であるはずの踊子が口に出そうとして出さなかったことばが「さよなら」であったと、なぜ断定することができるのだろうか。私たち読者はこの言説に、ある種の〈揺らぎ〉を感じないではいられない。  
(三川1998: 231)

しかし、これに対しては、中村 (2016, 2018) による次の明確な説明によって反駁可能である。

(39)はしけで遠ざかったこの距離で、込み入った話などできるわけがない。それに、「さよならと」であれば、「さよなら」ということばを発しようとしたことになりそうだが、ここは「さよならを」とある。仮に小さな子供に「おばちゃんに、さよならを言ってらっしゃい」とうながして、

子供がもし「バイバイ」と言ったとしても、親は別にとがめないだろう。つまり、「さよならを言う」というのは、別れの挨拶をするという意味なのだ。(中村2016: 115-116)

- (40)にもかかわらず、突如としてこの一文だけを読まれた人間にとって、そういう自然な解釈を妨げるものがあるとすれば、声となって発せられなかったことばが「さよなら」であると特定できるはずがない、とする素朴な思い込みだろう。作者の助詞の正確な使用に注目したい。一つは「さよならと」ではなく「さよならを」と書いた点だ。前者ならサヨナラという語に限られるが、後者はそういう特定の語形に代表される別れの挨拶という意味合いが強くなる。こんな距離で複雑な話ができるはずもなく、何か叫ぶとすれば別れのことばと見当がつく。(中村2018: 91)

川端自身も、(37)において、「ここの「さよなら」はただなにか別れのあいさつの言葉といふ意味」に取れる可能性を示唆している。

想定される反論の2つ目として、この一文が一貫して「私」の視点を反映した文であるならば、「さよならを言はうとした」の「言はうとした」が「踊子の意志」を表している事実をどのように説明するのかという点が挙げられる。このような指摘は、たとえば、三川(1998)の次の記述に認められる。

- (41)物語世界内の「私」が仮にどのような認識を行なったにしろ、「語り手」が現実的コードに基づいて〈語り〉を行なっている存在一つつまり、充分に現実性を帯びた人格的存在であるならば、この部分は恐らく「何かを言おうとしたようだが、……」あるいは、「別れのことばを言おうとしたようだが……」というように言説化されたはずである。ところが、実際に私たち読者の目の前にあるのは、「(踊子は) さよならを言はうとしたが、……」という言説なのだ。「語り手」はこの部分で「私」にとって完全な〈他者〉である踊子の〈視点〉に同化してしまっている。そしてこのことは同時に、物語世界内の「私」と「語り手」である《私》の自己同一性の崩壊＝《私》そのものの崩壊を意味しているにほかならない。(三川1998: 233)

しかし、この点に関しても、細川(1990: 16)の次の説明によって反駁可能である<sup>25</sup>。

- (42)たしかに「さようならを言おうとした」の「～しようとする」という表現は、話し手自身の意志を表す場合に多く使われるが、

彼は大学を受けようとしたが、両親に反対された。  
というような表現も可能であるし、第三者を動作主にとれないわけでもないので、ここで「踊り子」が動作主になっても構わないわけである。  
(細川1990: 16)

「～ようとする」という意志表現は、自己の内面を主観的に描写する「「わがごと」的把握」(渡辺1991)に限定される表現ではなく、他者の内面を外側から客観的に描写する「「ひとごと」的把握」(渡辺1991)を反映し得る表現でもあるわけである。

中村(2016, 2018)による「さよなら」の解釈、及び、細川(1990)による「言おうとした」の解釈は、問題の一文が一貫して「私」の視点から描かれているとみなすことを可能とする重要な論拠とすることができる。

本稿では、さらに、別角度からも、問題の一文が一貫して「私」の視点から描かれているとみなせることを論じてみたい。

問題の一文における「踊り子」の「省略」は、問題の一文が一貫して「私」の視点から描かれているがゆえに生じる現象と見る事が可能である。

久野(1978)は、複文「Yが……、Xハ……。」の主題「Xハ」の省略は次のような条件が満たされた場合のみ可能となる点を指摘している(Eは共感度(empathy)の略号を示す)。

(43)「Yが……、Xハ……。」の主題「Xハ」の省略は、次の二条件の何れかが充たされた時のみ可能である。

(i) 文全体が、X寄りの視点からの記述であり( $E(X) > E(Y)$ )、尚かつXが先行文脈の主題であることが明確な場合。

(ii) 話者が完全に自己をYと同一化し( $E(Y) = 1$ )、主文も、Yの視点から見たXに関する記述である場合。(久野1978: 122)

はじめに、(i)の条件を、次の例をもとに見てみよう(\*「花子は」は「花子は」を省略した文が不適格となることを示す)。

(44) 太郎がわざわざ花子に会いに来てくれたのに、\*「花子は」会ってやら

---

<sup>25</sup> 細川(1990)の調査(表1参照)によれば、「私」を選択した回答者(43.7%)の自由記述の多くに「～ようとする」についての言及があり、そこでは、「これは自分にはわからないことだからこの主語は「私」である」という趣旨の意見が見られたという(細川1990: 21)。

なかった。

(久野1978: 117)

久野 (1978) の分析に基づけば、この例は、X (= 花子) 寄りの視点を表す表現 (「来る」、「てくれる」、「てやる」) を含むことから、文全体がX (= 花子) 寄りの視点からの記述であると言えるものの、X (= 花子) が先行文脈から引き継がれた主題であることが明確ではないため、「花子は」の省略は難しいことになる。久野 (1978: 117) によれば、この種の文を適格文にするためには、次のように、文全体が、X 寄りの視点からの記述であることに加えて、X が先行文脈の主題であることをはっきりと示す必要があるという。

(45) 花子は、ぶあいそうな女だ。太郎がわざわざ花子に会いに来てくれたのに、[花子は] 嬉しい顔一つしなかった。(久野1978: 117)

次に、(ii) の条件について、次の例をもとに考えてみよう。

(46) 僕がわざわざ花子を訪ねて行ったのに、[花子は] 会ってくれなかった。(久野1978: 120)

久野 (1978) の分析に基づけば、ここでは、話者が完全に自己をY (= 僕) と同一化し、主文も、Y (= 僕) の視点を反映した「てくれる」の使用からも了解されるように、Y (= 僕) の視点から見たX (= 花子) に関する記述となっているとみなせることから、(ii) の条件を満たしており、「花子は」の省略が可能となっていることになる。

以上の久野 (1978) の主題省略に関する知見をもとに、「伊豆の踊子」の問題の一文を改めて見てみよう。

(47) 踊子はやはり唇をきつと閉ぢたまま一方を見つめてゐた。私が繩梯子に捉まらうとして振り返つた時、[踊子は] さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた。

「伊豆の踊子」は一人称の物語であることから、語り手が完全に自己をY (= 私) と同一化している。また、主文も一貫してY (= 私) の視点から捉えたX (= 踊子) の記述となっていると解釈することが可能である。すなわち、問題の文は、「語り手が完全に自己をY (= 私) と同一化し、主文も、Y (= 私) の視点から見たX (= 踊子) に関する記述である」とみなせることから、久野 (1978) の (ii) の条件を満たしており、「踊子は」の省略が可能となっていると分析することがで

きる<sup>26</sup>。

ここで、「主文がYの視点から見たXに関する記述」という条件（(43)の(ii)参照）を満たしていないと主題「Xハ」の省略ができないという点を、「伊豆の踊子」の問題のテキストを少し変えた次の例をもとに、確認しておきたい。

(48) 踊子はやはり臂をきつと閉ぢたまま一方を見つめてみた。私が繩梯子に  
捉まらうとして振り返つた時、[踊子は] さよならを言はうとしたが、  
それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せ 「てくれた」 / 「\*てあげた」。

この例は、主文の動詞に補助動詞の授受表現（ベネファクティブ）である「てくれる」、「てあげる」を付加したものとなっている。「てくれる」と「てあげる」は異なる視点制約を持つ補助動詞である。すなわち、「てくれる」は視点が受益者（恩恵の受け手）に置かれる補助動詞であり、逆に、「てあげる」は視点が授益者（恩恵の与え手）に置かれる補助動詞である。この点を踏まえるならば、(48)における主文は、「てくれる」が付加された場合は受益者である「私」（＝Y）の視点を反映した記述であり、「てあげる」が付加された場合は授益者である「踊子」（＝X）の視点を反映した記述であることになる。「てくれる」の例の場合は、「主文がYの視点から見たXに関する記述」という条件に合致する（この条件が指定する視点制約と矛盾しない）ため、自然であり、かつ、「踊子は」（＝Xハ）の省略も可能となっている。一方、「てあげる」の例の場合、「主文がYの視点から見たXに関する記述」という条件に合致しない（この条件が指定する視点制約と矛盾する）ため、不自然であり、かつ、「踊子は」（＝Xハ）の省略も不可能となっている。

以上のように、「伊豆の踊子」における問題のテキストにおいて「踊子は」が省略可能となっているという事実は、裏を返せば、（久野（1978）の(ii)の条件によって）問題の一文が一貫して「私」の視点から描かれている文であることを示しているとも言えるのである。

「伊豆の踊子」の問題のテキストを「不用意な粗悪な文章」とまで述べた川端であったが、村松定孝<sup>27</sup>による（49）の手紙による教示に基づき、最終的には（50）のように考えるに至っている。

<sup>26</sup> 前文における主題「踊子は」がピリオド越えをしている点も、ここでの「踊子は」の省略を支えている（3.1節参照）。

<sup>27</sup> 村松定孝（1918—2007）は、国文学者、文芸評論家。昭和女子大教授をへて昭和43年上智大教授となる。「泉鏡花全集」「鏡花小説・戯曲選」の編集を担当し、「泉鏡花事典」（編著）、「近代日本文学の系譜」などの著作がある。63年「あぢさゝる供養頌」で大衆文学研究賞（以上、『日本人名大辞典』による）。

(49)『風景』の一文を拝読し、一読者として、率直な感想を申し上げます。「さよならを言はうとした」の前に「踊子は」なる補訂は御無用かと存じます。何故かなら、その前の場面で、踊子は「私の言葉が終らない先に、何度となく、こくりこくりとうなづいて見せるだけだった」の叙述があり、彼女が物云はず唇をきつと閉ぢて涙を耐へてゐる趣きが十分にしのばれますれば、「もう一ぺん」うなづくのが「私」のはずはなく、且亦、主格を用いているので、くどくなり、文体の流れが濁るおそれあり。日本文学には、一つのセンテンスのなかで主格があちこちする例少なからず、むしろ伝統的情趣は先見のこの文体にきままるかと愚考仕ります。

(村松1968: 33)

(50)ちなみに、「踊子はやはり唇をきつと閉ぢたまま一方を見つめてゐた。私が繩梯子に捉まらうとして振り返つた時、さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた。」の「さよなら」から下の主格が「私」か踊子か、よく疑問とされて質問を受けると、この前に書いてみたところ、村松定孝氏から美しい手紙をもらつて、ここの主格はいらぬ、ない方がむしろよいと教へられた。私は村松氏にしたがつて、ここの主格はないままで通すことにきめた。

(川端康成「一草一花 「伊豆の踊子」の作者(八)」(『風景』8巻12号(12月号)、1967年、18頁)

(49)において、村松(1968)は「日本文学には、一つのセンテンスのなかで主格があちこちする例少なからず、むしろ伝統的情趣は先見のこの文体にきままる」と述べているが、この指摘は、主語が一文中で切り替わるといふ、日本文学作品の散文において伝統的(通時的)に認められる節連鎖における交替指示的な特徴(3.1節参照)を述べているものと理解することができる。

#### 4. おわりに

本稿では、川端康成の「伊豆の踊子」における下記のテキストについて、文学語用論の観点から考察を行った。

(51)踊子はやはり唇をきつと閉ぢたまま一方を見つめてゐた。私が繩梯子に捉まらうとして振り返つた時、さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた。

(川端康成「伊豆の踊子」322-323頁)

ここでの「さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづ



いて見せた」の箇所をめぐるのは、これまで、「省略された主体」に関する問題と「視点の一貫性」に関する問題が課題となってきた。本稿では、この2点の問題について考察を行い、次の点を主張した。

1. 「指示追跡」の観点から分析した場合、問題のテキストには、省略された主体が「踊子」であると唯一に特定可能な複数の言語的手がかりが用意されている。これらの言語的手がかりに意識的である限りにおいては、問題の省略された主体が「私」にも解釈可能な曖昧性を有するとみなす必要はない。
2. 「視点」の観点から分析した場合、問題のテキストは一貫して「私」の視点から描写されたテキストであることが、複数の文法的・語用論的な論拠から示される。それゆえ、問題の省略された主体を含む一文を、視点の一貫性を破る文とみなす必要はない。

文学語用論において重要となるのは、文学テキストの解釈が、語用論の諸概念を用いることによって、より精緻で奥行きのあるものとなることを示すことであると言える。また、文学研究の中で積み重ねられてきた優れたテキスト解釈の知見を、語用論研究に生かしていくという姿勢も重要であると言える。これらの点に意識的であることによって、文学と語用論との距離が近づき、文学語用論もさらに実り豊かな分野へと発展していくことになると思う。

#### [付記]

本稿は、モダリティワークショップ（於：関西外国語大学、2019年3月6日）、日本中部言語学会第66回定例研究会（於：静岡県立大学、2019年12月14日）での発表内容、および、モダリティワークショップのプロシーディングズ論文（澤田2019）に大幅な加筆・修正を施したものである。モダリティワークショップのメンバー、並びに、日本中部言語学会の参加者の方々からは、様々な観点から有益な御指摘を頂くことができた。また、コンサルタントとして韓国語や中国語に関して有益な御指摘・御助言を下された方々、筆者の講義（学部・大学院）に参加された学生諸氏、並びに、アンケート調査に協力された方々にも感謝申し上げたい。いうまでもなく、本稿に残された不備の責任はすべて筆者にある。

#### 参考文献

- 安藤宏（2014）「人称」安藤宏・高田祐彦・渡部泰明（著）『読解講義 日本文学の表現機構』157-179. 東京: 岩波書店.
- Black, Elizabeth. (2006) *Pragmatic Stylistics*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Chapman, Siobhan. (2011) *Pragmatics*. Hampshire: Palgrave Macmillan.

- Chapman, Siobhan and Billy Clark. (eds.) (2014) *Pragmatic Literary Stylistics*.  
Hampshire: Palgrave Macmillan.
- Chapman, Siobhan and Billy Clark. (eds.) (2019) *Pragmatics and Literature*.  
Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Comrie, Bernard. (1989a) Some general properties of reference-tracking systems. In:  
Doug Arnold, Martin Atkinson, Jacques Durand, Claire Grover and Louisa Sadler  
(eds.) *Essays on Grammatical Theory and Universal Grammar*. 37-51. Oxford:  
Clarendon Press.
- Comrie, Bernard. (1989b) *Language Universals and Linguistics Typology*. Second  
edition. Chicago: The University of Chicago Press.
- Comrie, Bernard. (1999) Reference-tracking: Description and explanation.  
*Sprachtypologie und Universalienforschung* 52 (3/4) : 335-346.
- Dahlstrom, Amy. (1986) Plains Cree morphosyntax. Ph.D. dissertation, University of  
California, Berkeley.
- Fillmore, Charles. J. (1981) Pragmatics and the description of discourse. In: Peter  
Cole (ed.) *Radical Pragmatics*. 143-166. New York: Academic Press.
- Fillmore, Charles. J. (1986) Pragmatically controlled zero anaphora. *Proceedings of the  
Twelfth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. 95-107.
- Foley, William A. and Robert D. Van Valin Jr. (1984) *Functional Syntax and Universal  
Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Givón, Talmy. (ed.) (1983) *Topic Continuity in Discourse: A Quantative Cross-  
Language Study*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Haiman, John and Pamela Munro. (eds.) (1983) *Switch-reference and Universal  
Grammar*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 平野啓一郎 (2019) 『本の読み方スロー・リーディングの実践―』 東京: 株式会社PHP  
研究所.
- 細川英雄 (1987) 『パリの日本語教室から』 東京: 三省堂.
- 細川英雄 (1990) 『日本語を発見する』 東京: 勁草書房.
- Huang, Yan. (2012) *The Oxford Dictionary of Pragmatics*. Oxford: Oxford University  
Press.
- Huang, Yan. (2014) *Pragmatics*. Second edition. Oxford: Oxford University Press.
- 池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』 東京: 講談社.
- Jeffries, Lesley and Dan McIntyre. (2010) *Stylistics*. Cambridge: Cambridge University  
Press.
- Jucker, Andreas H. (2015) Pragmatics of fiction: Literary uses of *uh* and *um*. *Journal  
of Pragmatics* 86: 63-67.

- Kataoka, Mai. (2016) Emending a translation into “scrupulous” translation: A comparison of Edward G. Seidensticker’s two English renditions of “The Izu Dancer”. 『総研大文化科学研究』 12: 83-101. 総合研究大学院文化科学研究科.
- 菊地康人 (1994) 『敬語』 東京: 角川書店.
- 小林洋介 (2016) 「偽装された“現在”—川端康成「伊豆の踊子」II—」松本和也 (編) 『テキスト分析入門—小説を分析的に読むための実践ガイド—』 133-142. 東京: ひつじ書房.
- 古賀裕章 (2015a) 「交替指示」斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編) 『明解言語学辞典』 87. 東京: 三省堂.
- 古賀裕章 (2015b) 「行為の方向性 (順行・逆行)」斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編) 『明解言語学辞典』 81. 東京: 三省堂.
- 近藤泰弘 (2001) 「古典語の統語法—「物語人称」を例として—」『国文学 解釈と鑑賞』 66 (1): 96-103.
- 近藤泰弘 (2005a) 「平安時代の副詞節の節連鎖構造について」『日本語学会2005年度春季大会予稿集』 149-156. 日本語学会.
- 近藤泰弘 (2005b) 「平安時代語の副詞節の節連鎖構造について」『國語と國文學』 82 (11) : 114-124.
- 久保田一充 (2017) 「出来事の発生を表す「～がある」文」『言語研究』 151: 37-62. 日本言語学会.
- 久野暲 (1978) 『談話の文法』 東京: 大修館書店.
- ラガナ、ドメニコ (1975) 『日本語とわたし』 東京: 文藝春秋.
- Leech, Geoffrey. (2008) *Language in Literature: Style and Foregrounding*. London: Longman.
- Leech, Geoffrey and Michael H. Short. (1981) *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*. London: Longman.
- Locher, Miriam A. and Andreas H. Jucker. (eds.) (2017) *Pragmatics of Fiction*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- MacMahon, Barbara. (2006) Stylistics: Pragmatic approaches. In: Keith Brown (ed.) *Encyclopedia of Language and Linguistics, vol 12*. Second edition. 232-236. Amsterdam: Elsevier.
- Mey, Jacob L. (1999) *When Voices Clash: A Study in Literary Pragmatics*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Mey, Jacob L. (2001) *Pragmatics: An Introduction*. Second edition. Massachusetts: Blackwell Publishing.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 東京: 大修館書店.
- 三上章 (1969) 『象は鼻が長い (改訂増補)』 東京: くろしお出版.

- 三上章 (1970) 『文法小論集』 東京: くろしお出版.
- 三川智央 (1998) 「『伊豆の踊子』再考—葛藤する〈語り〉と別れの場面における主語の問題—」『金沢大学国語国文』 23: 229-238. 金沢大学国語国文学会.
- 穆欣 (2013) 「日本語、韓国語、中国語の主題の省略について—川端康成『伊豆の踊子』の原文と翻訳文を検討材料として—」『異文化研究』 7: 31-42. 山口大学人文学部文化交流研究施設.
- 村松定孝 (1968) 「川端康成の連歌的手法 (一) 「伊豆の踊子」の主格をめぐって」『形成』 16 (1月号): 32-33. 東京: 形成社.
- 中村明 (2016) 『日本語の一文 30選』 東京: 岩波書店.
- 中村明 (2018) 『日本語の作法—しなやかな文章術—』 東京: 青土社.
- Nariyama, Shigeko. (2003) *Ellipsis and Reference Tracking in Japanese*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 成山重子 (2009) 『日本語の省略がわかる本—誰が? 誰に? 何を?—』 東京: 明治書院.
- 野田尚史 (1986) 「複文における「は」と「が」の係り方」『日本語学』 5 (2) (2月号): 31-43.
- 野田尚史 (2004) 「見えない主語を捉える」『言語』 33 (2) (2月号): 24-31.
- 小田勝 (2018) 『読解のための古典文法教室』 大阪: 和泉書院.
- 大堀壽夫 (2002) 「「交替指示」構文の通時相—統語変化とカテゴリー化—」大堀壽夫 (編) 『シリーズ言語科学 3 認知言語学 II: カテゴリー化』 297-321. 東京: 東京大学出版会.
- Pilkington, Adrian. (2010) *Literary Pragmatics*. In: Louise Cummings (ed.) *The Pragmatics Encyclopedia*. 251-253. New York: Routledge.
- サイデンステッカー、エドワード・G・安西徹雄 (1983) 『日本文の翻訳』 東京: 大修館書店.
- 澤田淳 (2007) 「日本語の授受構文が表す恩恵性の本質—「てくれる」構文の受益者を中心として—」『日本語文法』 7 (2): 83-100. 日本語文法学会.
- 澤田淳 (2009) 「移動動詞「来る」の文法化と方向づけ機能—「場所ダイクシス」から「心理的ダイクシス」へ—」『語用論研究』 11: 1-20. 日本語用論学会.
- 澤田淳 (2013) 「語用論」劉笑明・劉巖 (編) 『言語学—理論と応用—』 152-214. 天津: 南开大学出版社.
- 澤田淳 (2016) 「「行為の方向づけ」の「てくる」の対照言語学的・歴史的研究—移動動詞から受影マーカ—」小野正樹・李奇楠 (編) 『言語の主観性—認知とポライトネスの接点—』 87-110. 東京: くろしお出版.
- 澤田淳 (2019) 「川端康成『伊豆の踊子』における省略された主体の解釈をめぐって—「指示追跡」と「視点」の観点から—」モダリティ研究会 (編) 『モダリティワークショップ—モダリティに関する意味論的・語用論的研究— 発表論文集 第15巻』 183-205.

- 澤田淳 (2020) 「文法研究と語用論」加藤重広・澤田淳 (編) 『はじめての語用論—基礎から応用まで—』 141-157. 東京: 研究社.
- Sell, Roger D. (1998) Literary Pragmatics. In: Jacob L. Mey (ed.) *Concise Encyclopedia of Pragmatics*. 523-536. Amsterdam: Elsevier.
- Sell, Roger D. (2019) *A Humanizing Literary Pragmatics: Theory, Criticism, Education. Selected Papers 1985-2002*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Stein, Dieter. (ed.) (1992) *Cooperating with Written Text: The Pragmatics and Comprehension of Written Texts*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 高本條治 (1997) 「ただうなずいて見せたひと—川端康成「伊豆の踊子」の語用論的分析—」『上越教育大学研究紀要』16 (2): 467-483. 上越教育大学.
- 滝浦真人 (2017) 「異言語との出会いがもたらすもの」滝浦真人・佐藤良明 (編) 『異言語との出会い—言語を通して自他を知る—』 253-266. 東京: 放送大学教育振興会.
- 時枝誠記 (1955) 『國語學原論 續篇』 東京: 岩波書店.
- Van Dijk, Teun A. (ed.) (1976) *Pragmatics of Language and Literature*. Amsterdam: North-Holland Publishing Company.
- Van Valin, Robert D. Jr. (1987) Aspects of the interaction of syntax and pragmatics: Discourse coreference mechanisms and the typology of grammatical systems. In: Jef Verschuren and Marcella Bertuccelli-Papi (eds.) *The Pragmatic Perspective: Selected Papers from the 1985 International Pragmatic Conference*. 513-531. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Wolfart, H. Christoph and Janet F. Carroll. (1981) *Meet Cree: A Guide to the Cree Language*. Lincoln: University of Nebraska Press.
- 渡辺実 (1991) 「わがごと・ひとごと」の観点と文法論『国語学』165: 1-14. 国語学会.
- 山田敏弘 (2004) 『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法—』 東京: 明治書院.

(さわだ・じゅん／本学教授)